



# よこと館だより



Est. 1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

## 理事長閑話 埋め草 ⑤⑥

### ～外国人関係の子供の利用～

前回、社会福祉の国際化と至誠学舎立川の外国人関係者について感想を含めて書きました。その折「子供の福祉施設」(児童養護、保育)利用の外国利用者について調べて頂きました。外国籍、或いは片親又は両親とも外国人の数は、児童養護 12 人、保育 34 人となっています。定員に対しての利用率をみると、児童養護は定員 140 で利用率 8.6%、保育は定員 1106 で 3.1%となっています。児童養護の比率の高さが気になり、その背景にある福祉課題が垣間見える気がします。児童養護の利用は児童相談所の判断で措置という行政処分で施設の生活となった児童達です。児童養護の親の出身国を見てみるとフィリッピン4、中国2、ガーナ2、タイ、パキスタン、バングラデッシュ、モロッコ各1名です。保育では中国9、アメリカ7、ニュージーランド4、ベトナム4、中東2、韓国2、台湾、オーストラリア、カンボジア、フランス、モンゴル、EU各1名となっています。国数では 17か国に上ります。

少し古いデータですが、2013(平成25)年の日本の出生数は103万人です。そのうち片親が外国人の子供の出生数は3万人、3.1%でした。今後この比率は上がってくることでしょう。でも驚くことは出生数の減少です。最新情報で2019年には出生数87万人と激減するそうです。出生数90万人を切った現代日本の最大の社会課題、人口問題です。経済の活性化と豊かさも、働く人の確保も、福祉の充実も基盤となる人口の確保により初めて出口の見えるのです。

高齢領域ではすでに外国人をスタッフとして取り込んでいます。至誠ホームを多文化共生社会のモデルにしたいと考えています。それは日本の近未来は国籍を超えたダイバーシティ(多様性)にしかないと考えています。どこの国の人々でも、日本という島国に受け入れ、新しい国造りに努力するしか将来の日本を見通すことは出来ないのです。このままの人口減社会では、数百年後には日本は人がいなくなり、滅びてしまう危機なのです。

その意味でも子供の福祉の現場で大切に子供たちを育ててください。将来の日本を支えてくれる大切なヒューマンリソースなのでから。

理事長 橋本正明



## 事業本部長メッセージ

正月気分が少し落ち着き始めて「大寒」を越えると節分・豆まき、そして翌日は「立春」です。

毎年この時期、頭の中に流れるのが「早春賦」です。春は名のみ~の(^.^)で始まるこの唄は大正の初期に信州・安曇野を訪れた作詞家が雪解けの風景に感動して作られたそうです。一番二番は春といってもまだまだ寒いという描写ですが、この歌の三番「春と聞かねば知らでありしを」「聞けば急かるる 胸の思いを」「いかにせよとの この頃か」(リフレイン)この歌詞、妙に心が動かされます。寒い日が続いても「はる」という音がじっとしていられない様な気持ちにさせる、という意味でしょうか。年度末、年度始めは忙しく出会いと別れ、卒業に新入、転勤、転職などの分岐。すぐそこにある「春」は人生の多彩な趣を持って登場します。三番には、春になにかが始まるわくわく感があって堪りません。加えて八分の六拍子という「ワルツ」っぽいリズムも少し揺れる心を表しているようでまた堪りません。

高齢事業本部長 旭 博之

## 事業本部情報

### ☒ 児 童 事 業 本 部 ☒

今年度から事務局長なのですが、片付けばかりしている印象です。「至誠こどもセンター」の整備の一環で、昨秋障害総合化準備室の事務所ができ、そして年末に児童事業本部の事務局の事務所が新しくなりました。そこに至るまでは大変な道のりでした。

「かしのきプラザ」は20年以上蓄積された様々なモノであふれかえっていました。期限切れ文書や、児童館だった所の壊れたオルガンや電子ピアノ、足のないソファーや壊れたおもちゃなど行き場のないモノたち、ご寄贈品ですからそれぞれに思いがあるのでしょうか。ただこのスペースを旧甲州街道の向こう側のコンテナ倉庫の使用料に換算するとゾッとします。

子どもセンターと事務局は、それらを分別して不要なものを処分する作業の日々でした。ボランティアでGAPさんの心強い助けもいただき、一気に整理が進む日もありました。処分の際は日野地区の保育園でお世話になっている産廃業者さんに何度もトラックで往復していただきました。またスチール家具を金属屋さんに運んだり、紙ごみを紙処理業者さんへ運んだり。後援会のパンフレットと共に・・・子どもセンターと事務局はまだまだ片付けが続きます。果てしない道のりを一步步、いつかは到達する至誠こどもセンターの本格始動を夢見て。

そういうわけで、児童事業本部の事務所は工事が終わり、すっかり雰囲気が変わりました。ぜひお近くへお越しの際はお寄りください。

(児童事業本部副本部長・事務局長 高橋誠一郎)

### 🌸 保 育 事 業 本 部 🌸

「社会人基礎力」が進化し、平成29年に、「人生100年時代の社会人基礎力」と再定義されました。「社会人基礎力」は、経済産業省が平成18年に提唱し、職員の評価基準の中に取り入れられました。学校を卒業して就職しても組織の中で働くことになじめず、短期間で離職する人が多いことが問題視され、基本的な人間力を身に着けることが大切との観点から、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」、として3つの能力と12の要素の項目に整理したとされています。「社会人基礎力」への取り組みは、教育界や産業界で進められてきましたが、就学前教育から定年退職後の生き方まで当てはまるとされています。また能力を発揮するにあたっては自己を認識してリフレクション(振り返り)しながら何を学ぶか、どのように学ぶか、どう活躍するか、目的、学び、そしてその統合のバランスを図ることが自らキャリアを切りひらいていく上で必要と考えられます。

(至誠保育福祉研究所 高橋 紘)

### ☒ 高 齢 事 業 本 部 至 誠 ホ ー ム ☒

至誠ホームでは現在34名のフォーリンスタッフが勤務しており、年が明けた1月8日に「多文化共生交流会」がまこと館で開催されました。前年度に続いての会ですが、今回からは至誠ホーム後援会が共催することになり、渡辺後援会長や大村相談役が出席されました。メンバーの出身国はフィンランド・フィリピン・ブラジル・スリランカ・インドネシア・ベトナム・中国・カンボジアの8か国に及びます。それぞれの紹介や技能実習生の出し物などで大いに盛り上がった交流会になりました。出し物をしたインドネシア技能実習生の方々は、自前で衣装を工夫し勤務終了後に練習を重ねたということでしたが9名で息の合ったパフォーマンスを披露してくれました。至誠ホームで一緒に働く仲間として一体感を共有する機会になりました。また、フォーリンスタッフは同時に日本語の習得に努めています。日本語能力検定試験(JLPT)は年2回(7月と12月)、N1~N5の各レベルの試験を行っています(N1が難易度高)。先日、昨年12月の試験結果が発表され、N3(日常会話レベル)、N2(幅広い会話、新聞が読めるレベル)で多くの方が合格しました。日本語の習得は仕事にも大きく影響します。それぞれの努力に敬意を表します。

(至誠特別養護老人ホーム園長 鈴木 篤)

## 本部事務局だよ

### ～パンデミック(感染症の世界流行)～

新型肺炎(新型コロナウイルスが原因)が世界的規模で拡大している。いわゆるパンデミックである。歴史的には「ペスト」「コレラ」「スペイン風邪」がその代表各である。最近では2002年から2003年にかけてSARS(これも新型コロナウイルスが原因)が流行し、37ヶ国で774人が死亡した。流行の初期段階では、検査薬も治療薬も無い為、早期に大胆に徹底的に封じ込めるしかパンデミックを防ぐ手段はない。しかし、発生源の中国では、またしても初期の封じ込めに失敗している。SARSの経験が生かされなかったのである。医学・科学より政治家のメンツや行政組織の硬直化の生んだ結果であろうか。日本ではどうか?未だに発症していた旅行者の行動・経路は明らかにされていない。対策は後追いで少しずつしかなされない。日本の行政の行動様式と言われる「少なすぎて遅すぎる(to little to late)」であろう。私たちの法人には感染症弱者が大勢いる。対策は、大胆に徹底的に講じて防衛したいものだ。

(法人事務局長 野島 忠幸)

(編集後記) 寒いのが苦手、例年2月は一番寒さが厳しいので、2月を乗り切れば春が近づくはずだと思いながら過ごしてきましたが、今年はあまり寒さが身に沁みないのは、年齢を重ねて、鈍感になってきたのでしょうか(雲)